

衛といふ者、大聖寺藩知事の許可を得てその地の埋立に着手したが、工事未だ全く成るに及ばずして歿し、片山津の藤澤藤三郎亦その業を繼いだが、資金の缺乏によつて目的を達せられず、唯温泉守護の爲にした小佛堂を遺したのみである。六年四月片山津の廣瀬次郎七、金澤の田島政房と謀つて再びその業を興さんとして又蹙躓した。是に於いて藤澤近藤幸郎・中西定一之を慨し、職を辭して事に従ひ、片山津の清水伊右衛門、潮津の東出長四郎も之を助け、刻苦經營の後終に湖面を埋立て、泉源を確保することを得た。十年幸郎等旅舎を建て、十五年六月片山津の北出長右衛門等の主唱により、鑿井を以て温泉を地表に涌出させた。その温度は鑿井によつて異なるも、攝氏六〇度より七〇度の間に在る。泉質は食鹽泉、無色透明無臭で、強鹹と苦味とを兼ね、反應弱アルカリ性を呈する。

**カタヤマツガタ** 片山津湯 木曾義仲記に、『平家の惣勢ひた引に引くほどに、片山津湯を引廻し、うしほづの砂原まで一騎も残らず逃げにけり。』と見える片山津湯は、今の江沼郡柴山湯である。

**カタヤマツタイスケ** 湯山津大助 加越關靜記天文廿一年朝倉宗滴加賀に出馬の條に、『千足城には濱十三村の大將大坂 湯山津の大助・振橋の帶刀以下三千餘騎擁衛。』とある。大助は江沼郡片山津の人であらう。

**カタヤマノフタカ** 片山延高 通稱内膳。

越前府中柴で祿八十石から起り、遂に一萬石（一作一萬三千石）に増し、慶長二年九月廿八日伊賀守に叙爵せられたが、四年閏三月十日前田利長命じて、石川左源太・松田四郎左衛門

をして、大坂に於いてこれを殺させた。絶家録に、前田利家の病中徳川家康が見舞に來た際討果すべきことを徳山五兵衛・片山伊賀に命じたが愚意を申述べ、その後徳山は内府に一味の跡であり、片山も之と同じ様子に付き仕物に仰付けられたのであると記する。その事實の有無は別として、利家の遺誡中にも『片山伊賀事、身上より大氣を本と仕者候の間、自然の刻は謀反する事可有之候。言葉にも念頃の體を致し、油斷有間敷候。』とあるから、何れ反側計り難いので禍根を斷られたのであらう。

**カタヲカスケザエモン** 片岡助左衛門 天正八年前田利家に仕へて二百石を受け、御馬廻に列し、寛永三年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

**カタヲカトモノリ** 片岡知乘 通稱三石衛門。天正十八年前田利家に仕へ、十九年加増共百三十石を領し、後利長に大塚寺陣に隨つて功あり、又百石を加へ、次いで金の番取衆に列し、慶安元年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

**カタヲカマゴベエ** 片岡孫兵衛 屋號を越前屋と呼んだ。由緒書によれば、先祖浪人片岡休應、和州葛下郡に生まれ、初め伊兵衛と稱し、越前府中近邊片岡村に居住した。その長男兵七郎、初め伊兵衛後に孫兵衛と改め、前田利家府中在城の頃御用を承り、金澤に轉じて越前屋孫兵衛と稱し、天正十一年城外の尾坂下に居住し、老後休庵と稱した。其の子二代孫兵衛寛永十三年の火災後、邸地を上堤町に遷したとある。世々家柄町人の一人として町年寄・銀座等を勤めた。

て町年寄・銀座等を勤めた。

**カチ 歩** 元來は歩立で争戦に従ふ者の義で、士列である。大將の馬の廻りに隨從して守護するを任務とした。古くは徒とも書いたが、いたづらものと訓む字であるから、前田綱紀が歩に定めしめたと傳へる。歩の姓名は慶長十一年に夙く見え、前田利常の元和五年に齋藤又右衛門が切米三十五俵を賜うて歩に召出されたことがあり、その後萬治二年に給米二十五石を興へて新たに召出され、寛文中その給米二十五石は知行と紛らはしきを以て、切米五十俵と稱することとし、延寶五年から六組に分かれて、各組頭・小頭に分屬することになった。従來は一統打込んで支配せられてゐたのである。爾後之を六組御歩といひ、定番御歩と相分かつ。六組御歩の職は藩侯駕籠先の警衛を任とし、提灯敷許・鷹方御用・江戸火消敷許等の事に當り、切米三十俵乃至五十俵を受けた。又御歩と同列なるものには御算用者・同並・御料理人・同並・御細工者・同並・湖場奉行支配御歩並・御馬奉行支配御歩並・御小人頭・町下代・同並・御大工・同並・穴生・御壁塗・御普請會所下敷許・町奉行支配御弓方等御細工人・御茶道小頭・坊主小頭・檢校・御手役者御用町醫師等があつた。

**カチ 鍛冶** 能美郡板津郷に屬する部落。

**カチ 梶** 國至郡穴水郷之内大屋庄に屬する部落。枝村浦保は梶から西北一軒六に在る。

**カチガシラ 歩頭** 慶長十一年御歩の支配をしたもの、姓名は明らかである。其の後年寄衆が支配し、御馬廻頭又は人持組よりも支配し、次いで組外敷許から之を勤めた。是等の職格は支配又は職番頭とあるが確固には判ら

ない。萬治二年改めて御歩を召抱へられ、其の頭の人持組前田木工助忠辰・富田治部左衛門重持の兩名が組外敷許から兼帯を命ぜられた。此の時は御歩支配と稱した。寛文元年前田綱紀入國の頃中川栄女長輝、其の後青山勘左衛門某・藤田八郎兵衛安輝・津田伊織盛昭が勤め、延寶元年正月廿六日寺西左平次秀治、同年三月廿六日村金左衛門安元・不破平左衛門方好が命ぜられて六人となつた。三年三月廿四日中川長輝・津田盛昭は新番頭に轉じ、同日藤田平兵衛安勝・永井傳七郎正良之に代り、此の時まで六人が共同に部下を支配し、何れも御歩敷許と稱した。五年三月廿一日御歩が六組に分かれたれ、一番藤田安輝・二番村安元・三番寺西秀治・四番不破方好・五番藤田安勝・六番永井正良で、一組は三十人、内小頭二人、知行は平五十俵、小頭百石と定められた。此の時號許の名を絶めて、御歩頭と改稱し、同年八月十九日役料百五十石を賜はつた。以後連綿したが、追々轉役・死去等があり、其の代人を命ぜられなかつたので、享保元年に至つて終に中絶した。然るに同年七月十一日から御使番寄地藤太夫禮幹・山崎九郎右衛門由明・遠藤紋太夫高貫の三名が支配し、五年九月廿三日寄地禮幹は轉役して丹羽武兵衛廣成之に代り、七年二月十三日北川久兵衛重輝が命ぜられ、九年八月十一日杉江木工左衛門政弘・寄地禮幹・富永致馬全昌・丹羽廣成・北川重輝・遠藤高貫の六人が仰付けられ、以來連綿した。

**カチカタハラマチ 鍛冶片原町** 金澤の町名。元祿三年火災記に、鍛冶町・鍛冶片原町と見え、同九年池子町所遺敷許附に鍛冶片